

# センタージャーナル

■発行人／蓮容 健

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016

名古屋市中区橋二丁目 8 番 55 号

TEL (052) 323-3686



館内レイアウトも「開かれた教化センター」へ

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを

真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

## もくじ

- ・研究報告  
第37回平和展  
「真宗大谷派の海外侵出  
—華中開教—」 ②・③
- ・研修報告  
第15期研生活動報告 ④・⑤  
「報恩講」
- ・研究報告  
「真宗門徒の葬儀に関する調査  
レポート—葬列とサンマイ—」 ⑥・⑦
- ・INFORMATION ⑧

## 慶讃法要で、教区教化のセンターが生まれる。

### 二〇二八年は慶讃年間

二〇二六年度より（二〇二六年七月）、いよいよ名古屋教区・名古屋別院宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業推進委員会が開始します。今回の慶讃事業は、法要をゴールとするのではなく、その後にも課題が引き継がれていくよう、二〇二八年一月から十二月の一年間を慶讃年間として、様々な形で慶讃事業の願いを表現していく計画で進められます。

### 教化センターは「教化拠点」に

教化センターにおいては、慶讃事業を推進する委員会の中でも特に教化部会として関わっていくこととなりますが、それをきっかけとして、強く念願していることがあります。それは、教化センターが「教区教化のセンター」として、教化関連情報が集まる「教化拠点」、教化に関わる人たちが気軽に立ち寄れる「教化サロン」、多くの人たちが出会う「教化の広場」となっていくことです。どのような表現がしっくりくるのか、今はまだ分かりませんが、とにかく名古屋別院境内の一隅で仏教図書館を営むその場所に、情熱を持った人が、もしくは課題を抱えた人が、もしくは何となく物足りなさを感じている人が気安く出入りしてほしい。そして、それぞれの感覚が生かされ、アイデアがきちんと形となっていく、信頼される場所にしていきたい。その

ように念願しています。

そのような場所を、今回の慶讃事業を推進する中で形づくり、継続していくような取り組みます。

このようなことは、名古屋教区に教化センターが発足した時からの願いの一つだったのかもしれませんが、そして、これまでも試みられてきたことといえます。今回、改めてどのような場所になるのがよいのか、広く意見を聞き、試みを重ね、挑戦していきます。

### 様々な個人、団体、教化委員会の拠点にも

慶讃事業と歩みを合わせ、教区教化のセンター「づくりの試みもいよいよ始まります。現状の計画では、別院、教化関係の団体、組・寺院などで教化事業に取り組んでおられる方々に、それぞれがこれまで行ってきた事業を慶讃事業として企画していただくよう呼びかけます。同時に、慶讃事業推進委員会に関わっていただき、教化センターを拠点に、ともに企画を検討することで相互交流が生まれることも目指します。教区教化委員会については、これまでの事業を慶讃事業として継承し、「教区教化のセンター」構築の中で新しい形を模索します。

「教区教化のセンター」としての教化センター、次世代の教化委員会の構築について、慶讃事業の進捗状況とともに、様々な形で報告します。ご意見をお寄せください。

## 研究報告

大谷派の近現代史

## 第37回平和展「真宗大谷派の海外侵出―華中開教―」

大東 仁

## 一、追加展示

第37回平和展は、六年間にわたり続けた「真宗大谷派の海外侵出」の最終回とし、「華中開教」を展示した。その準備としては、従来通り原則月二回の学習会をへて積み上げた事実をもとに構成をしている。

しかし二月二十八日、突如アメリカ・イスラエルによるイラン攻撃がはじまった。この時点では平和展パンフレットの第二回校正を終えており、この攻撃をパンフレットに反映させることはできなかった。そこで展示構成を多少変更し追加展示することになった。

追加展示は、攻撃開始を報道した新聞記事。そして各宗教団体による攻撃中止・反対の声明・コメントの紹介である。それも「第三部 現代」のコーナーではなく、展示の最初に位置させた。そのうち全日本仏教会の発言は全文を展示し、発言のあった宗教団体名をすべて掲載した。そして会期中も新たな団体からコメント等が出されると、随時追加展示した。きちんとした学習結果としての展示ではないが、スタッフの願いは来場者にくみ取っていただけと考えている。残念なのは、イラン攻撃に関する真宗大谷派の発言が

なく、紹介できなかったことである。

## 二、特別展 南京事件への道

日中戦争における中国華中での最大の事件は、一九三七（昭和十二）年の「南京事件」である。そこで上海占領から南京占領までを特集し、南京事件の存在を実証した。

「南京事件」とは、虐殺・性暴力・放火・略奪の総称である。このうち虐殺と性暴力に注目した。「南京事件」については、否定論も多い。そこで日本の公文書の記述を中心に提示した。事件の事実だけでなく、確実な史料が存在することも紹介したのである。

虐殺については、第一一四師団歩兵第六十六聯隊第一大隊の『戦闘詳報』を用いた。『戦闘詳報』とは、公機関である日本軍の業務日誌。つまり公文書となる。ここには捕虜千五百名の殺害が記録されている。また、命令としては「刺殺」であるにもかかわらず、一部の部隊は「焼殺」を企て失敗した記述もある。上層部の命令に背き、勝手な殺害を実行しようとしたのである。

加えて浄土宗従軍僧侶の発言も紹介した。日本軍による南京占領は一九三七（昭和



日本軍の南京入城式

和十二）年十二月十三日。この発言は一九三八（昭和十三）年一月八日に発行された日刊宗教新聞『文化時報』に掲載された。つまり回想録という類のものではなく、リアルタイムでの発言であり、より信憑性が高いと判断してのことである。また性暴力については、「第十軍」（南京攻略戦は第十軍と上海派遣軍により実行された）の報告書を紹介した。これには陸軍大臣の閲覧印も押されており、「婦人暴行ノミニテモ百余件ニ上ル忌ムヘキ事態」と記述されているものである。

## 三、第一部 進出から侵出へ

真宗大谷派の海外開教は、一八七六（明治九）年八月二十日、上海別院開院を始

まりとしている。この開教事業は侵略を意図したものとはいえない。開院直後の別院事業は、①法要などの宗教活動、②本山派遣の留学僧による中国語学習、③上海の在留邦人に対する社会事業の三点に分類される。このうち③については、小学校・女学校の経営、医院の開設、日本人墓地の経営などがあげられる。上海開教については日本政府の協力もあったが、政府としても在留邦人に対する活動を期待することと推察される。大谷派の中国人に対する布教（教育活動）はこの後二十年後に本格化していく（のち中止）。

一九三二（昭和七）年一月二十八日、上海で日中両軍の戦闘がはじまる（第一次上海事変）。上海別院は、在留邦人の避難所となり、その職員は従軍僧侶として活動した。そして一九三七（昭和十二）年八月九日からの第二次上海事変では、別院は日本海軍の「英霊奉安所」（戦死者遺骨安置）となった。もちろんこの後の南京攻略戦にかけて、多数の従軍僧侶も派遣されている。

そして南京占領後の一九三八（昭和十三年）一月十三日、大谷派「法主」は日本軍慰問のため上海に向け出発。上海・蘇州・南京の日本軍を慰問し、南京では宣撫工作のために日本軍が作った「支那戦死者供養塔」の除幕式にも参加している。同年二月一日、「裏方」（法主夫人）も上海に到着した。「法主」と別行動での軍隊慰問である。南京では「上海派遣軍」司令官朝香宮鳩彦とも面会をしている。「裏方」は当時の皇后の妹。「法主」と同





「裏方」(「法主」夫人)の慰問行

行でなくとも特別な扱いを受けていた。

その後、南京で戦火が終息すると、大谷派をはじめ各宗教・各宗派が侵入し宣撫工作に従事した。華中では日本宗教を統括する「中支宗教大同連盟」が日本軍の主導により結成されている。

#### 四、第二部 服従と抵抗

かつての中国の首都であった南京の占領後、一九三九(昭和十四)年十二月八日、御前会議で「中国中央政権樹立工作」申し合わせが成立した。交戦中の中国国民党政権・共産党政権の他に、日本の意のままに動く傀儡中国政権の樹立を画策したのである。翌年三月三十日、汪兆銘を代表とする傀儡政権が南京に成立した。この政権は、華中・華北の日本軍占領地に存在する抗日中国人を日本軍と共同し武力攻撃するなどした。

このような日本政府による傀儡樹立工

作は、日本仏教による占領地中国仏教の傀儡化を推し進めることになった。大谷派は布教所の開設に加え、金陵女子技芸学校を開設しその任を推進した。また浄土真宗本願寺派は「南京仏学院」を創立し、傀儡中国僧侶を養成した。ここに在職した本願寺派僧侶は、日本軍特殊部隊(二六四部隊。細菌戦担当)との交流もあり、日本軍と日本仏教の関係が強かったことも証明される。

傀儡中国政権と傀儡養成学校の存在は、「日中友好」を演出したものとなった。また南京と名古屋での仏像交換の事実も、「日中友好」を演出するためのものであった。

しかし、占領下の華中の中国仏教にも日本に対する抵抗の姿勢を持つ僧侶は存在した。日本軍による寺院破壊への抗議を表明する僧侶、南京と名古屋の仏像交換への非協力などである。また氏名不詳の中国人僧侶は「日の丸と銃剣の威光を背景に、この大陸に流れ込んできて、我欲一点張りにわれわれをさいなもうとしている日本人をまずご教化下さい。近衛さんや東条さんのような日本の指導者にお念仏を勧めて下さい。日本の指導者が敬虔な仏教徒となつて下されば、この不幸な今日の事態も即刻解決するのではないでしようか」と発言している。占領地での「日中友好」演出は、成功には至らなかったといえる。

そして中国仏教の指導者たちも同様に日本の傀儡化を拒絶していた。円瑛は「貴国は仏教を信奉する国であり、国際的に

も慈悲平等主義を施行し、東アジアに平和をもたらし、世界平和をさらに進めるよう尽力すべき」と侵略加担の日本仏教への抗議ではなく、仏教徒としての平和活動を要請するものであった。また太虚も「慈心慧眼を開いて、自らを救い人を救うべき時である」と同様の呼びかけを繰り返していた。

そんな中、大谷派上海別院輪番を勤めていた藤井静宣は、一九四三(昭和十八)年一月九日に突然辞職した。この日は傀儡中国政権が米英に宣戦布告した日である。この前年、日本は傀儡中国政権を対米英戦に参戦させることを決定していた。戦前、藤井は私費で中国留学をし、中国仏教史の研究を志していた僧侶。いくら傀儡中国政権とはいえ、日本の都合で参戦させることに疑問を持つての行動と推察できる。

#### 五、現代

ここでは政府による軍拡政策。ウクライナ、ガザ、原発問題をとりあげた。特に「非核三原則見直し」と「安保三文書改定」に注目した。

また大谷派の動きとして、真宗大谷派宗務所発行の『宗門近現代史に学ぶ』(HPで公開)、東本願寺出版発行の『教団のあゆみ』と「平和展」の事実認識の違いに触れた。『宗門近現代史に学ぶ』はHPから削除され、『教団のあゆみ』には正誤表が追加されることになった。「平和展」の調査活動への評価と受け止めている。

なお、参観者数については昨年より微増している。「展示解説」の聴講者は、二倍以上の伸びとなった。しかし、案内アンケートには、「別院内の案内で知った」という回答が目立ち、情宣不足を痛感している。今後の課題としていくつもりである。

『宗門近現代史に学ぶ』 『宗門近現代史に学ぶ』 製作プロジェクト 真宗大谷派宗務所 二〇二五(令和七)年六月三十日

『教団のあゆみ』 真宗大谷派教師養成のための教科書編纂委員会編 東本願寺出版 二〇二五(令和七)年六月二十八日



展示解説の様子

## 研修報告

第十五期研究生生活動報告  
「報恩講」

報恩講に向けてお勤めの稽古

第十五期研究生の一年目は、『聖典』や教化センター研究課題などの学習に加え、報恩講についても学びを深めた。まずは、榎山正樹氏（第九組 教西寺住職）より、「報恩講とは何か」というお話をうかがい、お勤めの稽古を行った。そして、名古屋別院報恩講にそれぞれの形で参拝・参加した。実際に参拝・参加することで感じたことや、「こんな報恩講だったらいいなと思うこと」について各自レポートを執

筆し、一月に執り行った教化センター報恩講において発表をした。今回はその中から六名の声を紹介する。

## 「報恩講さん終わってまったなあ」

私は友人を誘って報恩講に参詣しました。本堂には、お焼香台の前で阿弥陀さんに話しかけるように何分も目を瞑っている人、節符を間違えながらも、「正信偈」真四句目下と一緒に勤める人、「正信偈」を全身で浴びるように体を揺らして聞いている人など、様々なご門徒さんがいらっしやいました。私は到底このようなご門徒さん方には及ばないレベルだと感じました。

榎山先生のお話の中で、あるご門徒さんのお話がありました。そのご門徒さんは、報恩講が終わり、皆でお茶を飲んでいる時に「はあ、報恩講さん終わってまったなあ、また一年待たなあかなあ」とお話しされたそうです。

私は仏事に関わる時、「ちゃんとやらなければいけない」と思いながら行ってしまうことがあります。私が報恩講中に見たご門徒さんや、榎山先生のお話にあったご門徒さんのようになれるよう、日頃からご門徒さんから学ぶ姿勢を忘れない

ようにしていきたいです。

稲垣<sup>いながき</sup> 大智<sup>だいち</sup>（第二〇組 慈法寺）

## プロ意識を持つていなければならないのではないか

私は今回十二月十六日の中日中に声明研修会の一員として初めて外陣に出仕した。外陣からの視点は中間から見ると、より鮮明に内陣の様相が見て取れた。出仕時の礼ひとつとっても角度や動きの重さがバラバラで、言葉を選ばずに言えば美しくなかった。内陣は浄土をかたどって荘厳されたものだと思わせた。内陣に入る人の所作や掃除など、その場所に関わるあらゆる立ち振る舞いが、本来形のない浄土というものを形づくって



教化センター報恩講でのレポート発表

いく、それが荘厳ということだと思う。もちろん毎度の法要を完璧なものにすることは難しい。様々な人が関わる以上、予期せぬことが起こることも少なくない。しかしだからこそ、ある種のプロ意識のようなものを持つていなければならないのではないだろうか。

役割をこなすことだけに収まらない、魅せるという意識が必要なのではないか。荘厳の心を身に付けていくことが重要であると再認識する場となった。

加賀<sup>かが</sup> 寺頭<sup>てらあき</sup>（第七組 徳善寺）

僧侶が主役ではない。門徒の人としてともに参る。

別院や本山でしか勤まることがない句切でのお勤めに新鮮さを感じつつ、聞き馴染みのある真四句目下との違いや音の高さなどに注目してお参りしていた。そんな中で、ふと音のずれのようなものを感じた。よく聞いてみると、句切ではなく草四句目下のような声明が聞こえてきたのである。それは外陣から聞こえたものではなかった。私の近くに座っていた女性が、赤本を手に「正信偈」を口ずさんでいたのであった。その声を耳にして、それまで内陣に向かっていた私の意識が、より近くに座っている参詣席の人びとに向かった。

兄妹、もしくはカップルと思われる若い男女、誘い合せて訪れたであろう年配の女性方、法要の始終を記録に収めようと熱心にビデオカメラを構える男性、法



要を度外視して会話をする人など、そこに座る人々の姿は本当に様々であった。その時ふと、「僧侶が主役」という感覚で報恩講にお参りしていたのではないかと感じた。僧侶である私も門徒の一人であるが、「ともに」という感覚が欠如しているように感じた。

ある女性の「正信偈」が御同朋御同行ということ忘れて報恩講にお参りしている私を照らし出すきっかけとなったのである。「道俗時衆、共に同心に」というところに立ち返る報恩講となった。

英 貴志<sup>はなき</sup>（第二組 東光寺）

## 別院職員として「団体参拝ツアー」を運営し感じたこと

報恩講は名古屋別院にとって一年の中で最も大きな行事である。別院職員として今年の報恩講に初めて携わった。その中で、私が感じたことを僭越ながら記していきたい。

報恩講では、お勤めが平常のものとは異なる。それに加えて、報恩講ならではのイベントなども数多く実施される。こういったことから報恩講は、普段お寺にお参りする方、そうでない方も様々な形で仏法に触れる機会が与えられる行事であると感じた。

実際に私がそのことを感じたイベントが、「団体参拝ツアー」である。「団体参拝ツアー」は普段、ご門徒様が入ることができない本堂の外陣や余間にお入りいただき、職員による本堂の荘厳や軸（特



「私にとっての真宗本廟」をテーマに研究生奉仕団

に『御絵伝』についての説明を受けながら、堂内で日中法要にお参りいただくというものである。私は補佐という立場でこの行事に参加させていただいた。

「団体参拝ツアー」には、普段からお参りに来られる方とそうでない方など様々な方々に参加していただいた。様々な皆さんが同じように興味を持ってくださり、仏法を通じて人々が繋がっていくような感覚を感じられた。

山内 崇<sup>やまのつち しゅう</sup>（第三組 浄休寺）  
名古屋別院職員

## 親鸞聖人の生涯を描いた絵を解説する絵解き法話増やして

報恩講期間中、土曜・日曜に参拝させ

て頂きました。土曜日は、『絵伝』。いつも興味深く見入り、聴き入っています。できれば、報恩講の期間中に、複数回開催して欲しいです。開催日に三回程度、それを開催期間中に三日程度開いて頂けたら嬉しいですね。

今回の報恩講では、久しぶりにお斎を頂きながら、これまでに報恩講で頂いたご縁を思い出していました。隣り合わせになった門徒様からお声掛け頂き、午後の聞法・行事を一緒に拝聴させて頂き、詳しく説明頂いた事や、翌日以降の御斎券を頂いた（ご馳走して頂いた）事を懐かしく振り返っていました。

私にとって、参拝・聞法等によって自己を省みる、仏恩への感謝につながることに幸せであると念っています。今回の報恩講では、御斎の折に、念わせて頂いた事柄が、最もありがたく幸せを感じさせて頂いた事柄でした。ありがとうございました。

舟木 誠<sup>ふなき まこと</sup>（第三〇組 一心寺門徒）

## 自分のための報恩講を思い出させてもらった

今まで「報恩講」の意義を尋ねられたら、私は教科書どおり「報恩謝徳のため」と答えていた。だが、自分の言葉になっておらずしっくりこなかった。

それが名古屋別院報恩講を機に少し変わった。報恩講とは、自分が人との関わりの中で生きているんだということを、一年の区切りとして感じる機会ではないか。

また、私には誰かのために報恩講をつとめるという意識はあまりなく、自分のためにやっているという意識が強い。そうして様々な人が、「自分のために」と関わった結果、「報恩講」が一つの場となって成立している。損得勘定ではなく、嫌々の人もいるかもしれないが、自分の意志で関わっていると思う。

田中 田実<sup>たなか たのむ</sup>（第二組 田中寺）

※これまでの学習会の日程は八面参照



同朋会館で一泊二日、寝食をともにして語り合った

## 研究報告

## 尾張の真宗史

## 「真宗門徒の葬儀に関する調査レポート―葬列とサンマイ―」

小島 智

最初に私事で恐縮であるが、三月末に父である自坊前住職が命終し、寺葬を執り行わせていただいた。現在、真宗の葬儀では出棺勤行の後、肩入れ式（門徒葬では略することが多い）、そして告別式を兼ねた葬場勤行をつとめ、火葬場へ出棺し茶毘に付して収骨。さらに帰院後、還骨勤行というのが一般的であろう。実際、自坊においても、やや変則的にせざるを得なかったが、概ねこの流れで進めていった。

しかし、先学の調査・研究の成果に触れると、このような葬儀式の形態は比較的新しいものであり、真宗門徒がつとめてきた伝統的な葬送儀礼の変形であることがわかる。逆に言えば、現在の形態だけを見て真宗の葬送儀礼を語ることは、真宗門徒が培ってきた葬送儀礼の、本来的な意義を見失わせることになるかと危惧するのである。そこで本稿では、真宗葬送儀礼の意義を明らかにする手始めとして、特にかつては中心的な儀礼として行われていた、サンマイへの葬列について確認してみたいと思う。

※ただし、この課題については当センター

にて、「真宗の葬儀」研究学習班（筆者チーフ）の共同研究としてしばらく取り組み、改めて全体の成果を発表する予定であり、ここではまだ覚書程度のものであることをお断りしておきたい。

\*\*\*

さて、日本においては第二次大戦後、各地で公営の火葬場の設置が進められ、火葬が推進されていった結果、一九八〇年には土葬に対し火葬の占める割合が九

一％となり、二〇〇五年には九九・八％になったという<sup>①</sup>。このことから、ともすると、専用に建設された公営火葬場での火葬が当たり前であったかのように錯覚するくらいがあるが、そもそもは、大正一四（一九二五）年の段階で火葬率は四三・二％であり、公衆衛生、都市計画等で市街地での埋葬が禁止されるなどして火葬が次第に浸透し、五割を超えるのは一九四〇年代であったという<sup>②</sup>。名古屋市では大正四（一九一五）年六月一日、いち早く市営の八事火葬場が稼働を開始しているが<sup>③</sup>、近隣自治体ではまだ近代的な火葬場設備は普及しておらず、それ

以外での葬制が一般的であったのである。

ただ、真宗門徒は中世後半から火葬を継続してきた傾向が強いと指摘されるように<sup>④</sup>、真宗が広まった尾張地域でも基本的には火葬であり、集落で維持された火葬場によって執行されてきたことが窺われる。実は昨年十一月、当センター「真宗の葬儀」研究学習班では現地調査として、真宗信仰の根付いた地域である尾張最西部（現・愛西市）の、かつて集落の火葬場であった施設を訪ね、それを使用していたの葬儀に立ち会ったことのある御住職から話を伺った。まずは次に、その時の内容をまとめておきたい。

\*\*\*

このような集落に存在する小規模な火葬場は「サンマイ」と呼ばれ、集落の外れに位置するのが一般的である。愛西市



(写真A)

中央の蓮華座に棺を置きお勤めした。その後、奥の火屋で茶毘に付した。

葛木町（旧海部郡立田村大字葛木）長池・問源寺（真宗大谷派）住職の菱田昭充氏によれば、葛木町長池地区では南隣の高田地区と共同で火葬場を持ち、やはり「サンマイ」と呼んでいたという（写真A参照）。三五年から四〇年ぐらい前まで使用し、自宅や寺院本堂で葬儀をつとめた後、棺をリヤカーに載せ葬列を組んで（いわゆる「野辺送り」）、高田地区の南端にあるサンマイまで搬送し、灰葬勤行をつとめ火屋に収めて茶毘に付したのである（葬儀後すぐに灰葬勤行をつとめ導師が葬列に入らない場合もあった）。火葬に従事するのは隣組であり、葬儀前日の薪の用意から始まって、火屋に収めて点火した後はその前で一晚泊まり込み、翌日の昼頃まで薪をくべて焼くといったように、三日間の取り持ちであったという。なお、四



○年近く前に津島市の葬儀社が関わるようになるまでは、枕飾りから納棺、葬儀壇の設え、司会に至るまですべて隣組が仕切っていたという。葬列は先頭に高張り提灯（基本左右二人）、導師（導師が参列しない場合は地域の代表者）、棺を乗せたりヤカー（隣組二、三人）、喪主・親族の順で、それこそ四〇年近く前までは、喪主の出で立ちも白袴で、竹杖を持ちワラジを履いていたという<sup>⑤</sup>。また、自宅或いは本堂からサンマイまでの辻の角々には白い提灯を掲げ、これらは雨天でも関係なく執り行われた。

さらにそれ以前は、葬場勤行もサンマイでつとめられていた。このことは、川島真量氏が「葬場（勤行）」は野辺の茶毘所に於いてするのが本儀であるが、出棺後席を改めて本堂または広間でも差し支えない」と述べているように、本来、出棺して「野辺の茶毘所」であるサンマイまで葬列を組み、その後葬場勤行、茶毘に付して灰葬勤行をつとめていたのが、会葬者などの都合で先に別の場所にて葬場勤行をつとめ、それからサンマイで灰葬勤行、という形式に移り変わっていったものと推測されるのである<sup>⑥</sup>。

\*\*\*

山田慎也氏によれば、そもそも真宗に限らず一般に日本の葬儀では、自宅から



(写真B)  
『柳葬具総本店創業百年史』550頁より転載。  
明治後期から昭和初期まで真宗の葬列で使用された寝棺輿。  
6人で担いだものという。

葬儀式を行う場所までの葬列が最も重視されていたという。それが大正期になり、東京などの都市では交通の発達や生活環境の変化によって路上での葬列が困難となり、それに変わるものとして、参列者が一堂に会する告別式という形態が誕生し、昭和初期には葬儀式と告別式を自宅で行い、その後火葬場へと移動する葬儀形式が都市部で広まっていったというのである<sup>⑦</sup>。つまり、葬儀の中心的儀礼が葬列から告別式に移行したのであり、さらに、そこでは葬儀壇がより重要視されるようになっていったのである。もっとも、その葬儀壇では当初、棺は一番奥に、第二次大戦前の段階では、大

正期まで葬列で使用された輿に収められて安置されることもあったことには注意しておきたい。要するに、葬儀壇の原型は葬列で用いられた輿なのであり<sup>⑧</sup>、葬列が行われなくなつて使用され始める宮型霊柩自動車も、輿からそのデザインを受け継いでいることは、実際に使用されていたという輿の姿（写真B）から容易に想像できることである。

従つて、出棺勤行後に行う肩入れ式も、本来は自宅出棺後に棺を収めた輿を担いで葬列を組んだものを簡略化し、葬場へ移す形態をとるものと理解することができ、その為に輿に模した台を用意する必要があると分かるのである。

\*\*\*

以上、真宗の葬儀におけるサンマイへの葬列について、概略を尋ねてみた。まだまだ充分に検討できている訳ではないが、真宗の葬列は、死を「穢れ」とみなし亡き人との関係を断ち切るための絶縁儀礼ではなく、亡き人を浄土へ往生する諸仏として送り出すための儀礼と捉えることができるかと考えている。それが昭和初期までは都市部においても普通に行われていたのである。その後、都市部では交通事情や生活環境等により困難となつたが、郊外の地域社会では継続されてきた。ところが、平成期以降、地域社会で培

われた葬儀風習が一掃されるような変化が起きる。都市から発生した葬儀会館の急速な普及である。そして、公営の大規模火葬場が主流になる中、サンマイへの葬列は完全に忘れ去られようとしている。しかし、かつてはこれが主流であり、真宗の葬儀形態も、葬列とサンマイが前提となつて組み立てられているのである。儀礼としての大切な意義がそこには伏在しているのである。

①『日本葬制史』（吉川弘文館、二〇二二年）第五章「近現代の葬送と墓制」（山田慎也執筆、第六節参照）  
②註①と同じ。  
③『新修名古屋市史 第十巻 年表・索引』（二〇〇一年）年表参照。  
④岩田重則「火葬と土葬—日本人の死生観—」（青土社、二〇二五年）「はじめに」参照。  
⑤葬具全般は旧立田村の役場にあり、そこから借りて執行していたという。ちなみに、葬儀の荘厳具としてはよく「祭壇」との言葉が用いられるが、真宗の葬具の名称としては違和感を覚えることから「葬儀壇」と表現していく（「蒲池勢至—真宗と現代葬儀—「葬儀」と「死」のゆくえ—」（法蔵館、二〇二二年）付記参照。また、葛木町の辺りではリヤカーの上に枕木を二本渡し、その上に棺を安置したということであったが、他地域では輿に取って搬送する場合もあった。『柳葬具総本店創業百年史』（一九七七年発行）には、明治後期から昭和初期に使用された輿の写真が掲載されているが（写真Bはその一例）、後述するようにこの輿と葬儀壇の関係にも留意する必要がある。  
⑥川島真量編『大谷派寺院年中諸法要行事』（法蔵館、一九六四年）第七章「葬儀に関する諸式」（野辺の茶毘所）引用文の丸括弧内は筆者補足。なお「野辺の茶毘所」での荘厳については、真宗の葬儀ではサンマイ中央にある棺台に棺を安置し、その前にもない。とはいえ、自宅等で葬儀が行われる場合、実際には真宗門徒でも葬儀壇が広く用いられたことを本稿では踏まえている。  
⑦註①書、第五章第二、三、五節参照。  
⑧註①書、第五章第二、五節参照。

## 研究業務報告 (2025年12月～2026年5月)

## ①大谷派の近現代史

## ◆平和展学習会 実施

12月15日・1月22日・1月29日・2月13日・2月25日・5月7日

◆平和展特別学習会「二つの観音像から問われていること―日中戦争と二つの観音像―」  
開講 (2026年3月5日/教務所1階 議事堂/約30名聴講)

講 師:角田 玉青 氏(二つの観音様を考える会)

◆第37回平和展「真宗大谷派の海外侵出―華中開教―」  
(2026年3月17日～23日/教務所1階 議事堂/約350名来場)

★4、5面に報告記事を掲載

## ②尾張の真宗史

## ◆「真宗の葬儀」研究・学習班 学習会 実施

12月18日・1月23日・3月4日・3月25日・4月23日・5月25日

◆特別講座「なぜ葬儀・法事を勤めるのか? ～仏事としての意義～」開講  
(2026年3月18日/教務所1階 議事堂/約90名聴講)

講 師:海 法龍 氏(東京教区 長願寺住職)

## ◆御消息を読む会

12月9日・1月16日・4月7日

★歴代門首の御消息を解説する定期学習会です。参加希望の方はご連絡ください

## ③現代社会と真宗教化

## ◆グリーンケア研究・学習班 学習会 実施

12月22日・1月28日・3月9日・4月15日・5月22日

◆特別講座「グリーンに向き合うために～自他の喪失への関わり方について～」開講  
(2026年2月18日/教務所1階 議事堂/約80名聴講)

講 師:五藤 広海 氏(一般社団法人リヴオン常務理事・浄土真宗本願寺派 光蓮寺 住職)

## ◆学習テキスト『御同朋を生きる』を通して、当センター関係者による「是旃陀羅」問題の学習 実施

12月16日・1月22日・2月26日・3月17日・4月10日・5月22日

## ④真宗の仏事

## ◆真宗の仏事 研究・学習班 実施

12月5日・1月29日・3月5日・4月17日・5月13日

## ◎教学研究機関交流会参加、大阪教区教化センター視察

2月9日、10日「第13回 全国教学研究機関交流会」(真宗大谷派教学研究会主催)に参加した。「現代における宗教の課題―地下鉄サリン事件30年を契機として」というテーマで、宗教情報サーチセンター長の井上順孝氏が講演。その内容を踏まえ、平野喜之氏(金沢教区教学研究室長)と井上氏の対談や、参加者相互の意見交換を通して学びを深めた。また、10日には大阪教区教化センターの視察を行った。



## ◎慶讃事業準備委員会 教化部会会議

12月25日・1月23日・2月20日・3月17日・4月27日・5月20日

## ■教化センター

〈開館〉月～金 10:00～21:00

〈貸出〉書籍2週間 視聴覚1週間



教化センターSNS

## ■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ

【お東ネット】<https://www.ohigashi.net> お東ネット

検索

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

## 研修業務報告 (2025年12月～2026年5月)

## ①聖典研修

◆『観無量寿経』の教え「観経和讃」を通して  
講 師:鶴見 晃 氏(同朋大学教授)

第2回 12月9日 約70名聴講

第3回 2月24日 約70名聴講

第4回 4月7日 約60名聴講

\*全5回/教務所1階 議事堂

## ②研究生

## ◆『聖典』に学ぶ

講 師 市野 智行 氏(同朋大学准教授)

1月19日・4月27日

講 師 小川 正幸 氏(第22組 磔朋寺住職)

12月26日・3月30日・5月27日

## ◆センター研究業務に学ぶ

3月19日 講師 大東 仁 氏(業務嘱託[研究])

## ◆報恩講

12月2日「報恩講について」講師 榎山 正樹 氏

(第9組 教西寺住職)

12月13日～18日 別院報恩講参拝

1月26日 教化センター報恩講

★4、5面に報告記事を掲載

## ◆上山研修

・上山事前研修「私にとって真宗本廟とは」

2月13日 講師 蓮容 健 氏(教化センター主幹)

・研究生奉仕団

2月16日～17日

## ◆実践研修

・ファシリテーター講座

4月14日 講師 竹中 慈祥 氏(京都教区 真廣寺住職)

・フィールドワーク

5月11日 講師 宮田 素樹 氏(教化センター事務長)

《雑感》釈尊は数多くの喩えを説かれているが、そのなかに「筏の喩え」がある。川を渡り終えた後に筏を持ち運ぶ必要がないように、たとえ正しい教えであっても拘泥すべきではないと説かれている。「正依の經典」とは、静的な固定化されたものではなく、み教えとしてダイナミックに私にはたらく、まさにそのときにこそ成就するのではないだろうか。經典の言葉が問われるとき、同時に經典に対する向き合い方が問われているように思う。(た)

## INFORMATION

## ◆2026年度「聖典研修」

テーマ『観無量寿経』に学ぶ 善導大師、親鸞聖人を通して

講師:鶴見晃氏(同朋大学教授)

時間:午後6時～8時

会場:教務所1階 議事堂

期日:(全5回)

第1回 2026年10月20日(火)

第2回 12月8日(火)

第3回 2027年2月16日(火)

第4回 4月13日(火)

第5回 6月15日(火)



## ◆2026 あいち・平和のための戦争展 出展

日 時 8月13日(木)～16日(日) 午前10時～午後5時

会 場 市民ギャラリー矢田(名古屋市東区大幸南1-1-10)

入場料 500円(高校生以下、障がい者および介助者 無料)

問合せ 2026 あいち・平和のための戦争展 実行委員会

TEL052-931-0070